

涙色の空

浅雪ささめ

「もうすぐですね、先輩」

「ああ、そうだな。たくさん準備もしたし、俺たちも楽しもうな」

それに俺はこれが最後だし。と先輩は憂い顔で付け足す。私はそんな先輩の顔は見たくなかった。

だから、そんなこと言わないでくださいよーと、笑いながら返してみる。すると先輩も笑みを作って、一緒に笑ってくれた。

そう。この笑顔だ。私が惹かれたのは。

ではさようなら。またな。最後にいつものように言葉を交わし、二人別々に下校した。

私の通う大竹宮高校おおたけみやでは二週間後に文化祭をやる。この文化祭こそ、私がここに進学を決めた一つの理由でもあった。昨年、友達に誘われて半ば強引に、この学校の文化祭に足を運んだ。

最寄り駅に着き、もう少しで学校というところでスマホから顔を上げ、別行動を提案したのは彼女だった。

直接見てはいないけれど、たぶん会いたい人、具体的に言うとなんか彼氏だろうなという見当は付いた。だったらなんで私を誘ったのかは分からないが、そんなことはどうでも良く感じていた。

二人の時間を友達である私が壊すわけにもいかないし、私はそれを承諾した。

「ありがとう」

そういう彼女は女の中の私が見惚れるほどに魅力的だった。「可愛い」と言う言葉が喉まであがってくるほどに。

校門をくぐり、じゃあ後でね。と別れ、私は一人になった。きつと、今日はもう彼女と会わないのだな。という妙な確信があった。

お昼頃になったら、メッセージアプリに『ごめんね!!』なんて送られてくることだろう。

入り口で貰ったパンフレットに一通り目を通したが、特にめぼしい物は見当たらなかった。あ、でも、この焼きそばは食べたいな。

まだ朝と呼べる時間帯だからまだ、おなかはずいといけれど。

このまま所在なく歩いていても仕方がないか。この高校に知り合いの先輩がいるわけでもないし。

そう思っ、ふらっと立ち寄った教室は文芸部誌を売っている、周りの喧騒な雰囲気とはかけ離れたところだった。

「こんにちは。どうぞ」と言われ、部誌を一冊手に取る。窓際に椅子に座り、本を読む少女が表紙だった。私は受け付けの先輩に百円玉を二枚、手渡した。

適当な席に座り、パラパラとページをめくる。厚さの割に、目次にある名前はたった三人分だったことに、少なからず驚く。

そのまま私は物語の世界に潜り込んだ。

「驚きましたか？」

「え？ はい、何か用ですか？」

本は夢中になっていたのに、急に声をかけられて驚いたのは事実だ。

「いえ、そうではなく、その部誌」

「そう言われて合点がいった。」

「はい、皆凄いですね。こんなに書けるなんて」

文庫本一冊ほどの分量がありそうだ。私なんて短編を書くのも挫折したのに。

「それは三人分ですが、誰も入らなければ来年は俺一人で、そのまま廃部になるかもしれないです」

だから、と目の前の眼鏡を掛けた先輩は続ける。

「どうせ最後になるんなら、派手に長編にしてみないかって。自分たちの書きたいものを詰めこもうって。そうなったんです」

それを聞いて、私は何を思ったか、自然と言葉が口からこぼれ落ちた。

「少なくとも私は入りますよ」

今思うと、とても嫌みを含んだ言葉に聞こえていたかもしれない。

「本当かい？ 嬉しいよ」

そのときの先輩の顔を今でも鮮明に思い出せる。とても柔らかい笑顔だった。

これが、私と先輩の出会い。

この翌年、私は無事に大竹宮高校に受かり、文芸部へと入部した。

私以外に入ったのは三人だ。廃部にはならないだろう。

ただ、先輩は今年の文化祭が終わったら、親の都合で転校してしまうらしい。

それを聞いたのはつい二、三日前のこと。部誌を綴じ込んでいる作業中、急に聞かされた私達はただ驚くことしか出来なかった。

そして時は流れ、何も言えずに文化祭が始まった。

一緒に見て回る友達がいなくもないが、今日はその輪に入りたくはなかった。だから、文芸部の部誌販売にほとんどの時間を充てる。

言い方が酷いが、意外と人が多く来てくれて、ちゃんと部誌は完売した。

心にもやもやが残ったまま、高校初めての文化祭は幕を閉じた。

「打ち上げに行かないか？」

片付けも終わり、そろそろ帰ろうかというところで先輩がそう言うが、私以外の三人は申し訳なさそうに首を横に振った。

「私も」

行きません。そう言おうと思った。

だけど、先輩の悲愴な顔を見た瞬間、そんなこと言えるはずもなかった。

最後に見送ってあげられるのは、私しかない。

「私は行けます」

「そうか。ありがとう」

その放課後、私は先輩と喫茶店に入った。お洒落な雰囲気というわけでもなく、先輩らしいと言えば先輩らしい。テーブルが二つ三つあるくらい、小さな喫茶店だった。

ミャオと鳴く猫の音が聞こえてきそうだった。

二人でコーヒを頼んで、先輩はミルクと砂糖を二つ。甘いのが好きなんだ。そう照れ笑う。

私はミルクだけを入れてカップに口をつけた。

「おいしいですね」

「そうだな。とても美味しい」

会話らしい会話はそれくらい。でも、私にとっては充実した時間になった。

そしてとうとう先輩がいなくなる日がきてしまった。

ゆつくりと時が進んで欲しいと願うときほど、早く感じることはないと思う。

カレンダーをめくるのも億劫になってしまう。

学校の帰りにそのまま隣の空港まで電車で向かうと言うので、私も見送っていいですか？ と聞いてみた。すると先輩はいつかの優しい笑みで「うん」と、頷いてくれた。

校門から駅までは歩いて十分ほど。

何か話さなきゃとか思ってしまうけど、特に話題も見当たらず、結局開けかけた唇をもう一度くつつける。何を話しても、ただ虚しくなるだけなのかもしれない。

結局駅に着くまで、お互いに一言も話さなかった。

既に駅にいた先輩の親に会釈をする。「彼女？」と先輩

は親にからか揶揄われていたが、そんな関係じゃないことは私が一番知っている。

電車が来るまであと数分。その数分が過ぎれば、先輩とはもう会えなくなってしまう。

ホームへと繋がるエレベーターを降りる。

そして黄色い線を見下ろしながら、電車が来るのを待つ。

「お前も体に気をつけてな」

「はい」

やめて。

「またいつか会えたら良いな」

「そうですね」

やめて。

「これからはお前が部長だ」  
「頑張ります」

やめて。

もうやめて。

私の中で消したい思いが、どんどんと膨れ上がってしまふ。

それでもそれを必死に抑えながら、無理に口角を上げ先輩を見送る。

「先輩。私のこと覚えていてくださいね」

そんなことが無理なのは分かっている。先輩はカッコいいし、とても優しいから。きつと、すぐに私よりも可愛げのある彼女を作ってしまうだろう。そして私のことも「同じ部活だった後輩」になり、「ポニーテールの子」になり、終いには同じ時間を過ごしたことも、名前すら忘れ去られる。  
だから本当は「私のことは早く忘れてください」と言うのが正解なのに。

先輩はほんの一瞬目を見開いて、うん、忘れないと目を赤くして言っつて電車に乗り、扉は閉められた。

先輩は私の顔から目を離さずと手を振ってくれている。私も笑顔で振り返す。鏡を見れば私は今、変な顔になっているだろう。目の前の先輩が笑っているのは、もしかしたらそのせいかな。

発車します。というアナウンスと共に先輩は段々と私と離れていく。

もう見えなくなった。

しばらくその場で呆けていると、ポツ、ポツと、私の頬を濡らす音が聞こえた。この音が降ってきた雨の音なのか、それとも私の目から溢れ出ている雨なのかは、もう見分けがつかなくなっていた。

ふうと息を整え、駅構内のコンビニで傘を買う。幸い、最後の一本が残っていた。

一步駅から出ると、チラチラと降っていた雨は、地面を打ち付ける雨に変わっていた。ゴロゴロという音も響いている。

私は傘を差すことすら面倒くさくなって、傘を閉じたまま家へ帰ることにした。  
体に当たる冷たい雨がとても心地いい。

## 涙色の空

このまま私の中の「好き」と言う気持ちも洗い流されればよかったのに。